

駄文ノベル（シリーズ その三）

和泉葛城山殺人（？）事件（仮題）

作 蜚蜚（かげろう） 21

▲実に荒唐無稽な駄文物語！誤字・脱字・当て字などいい加減な言い回し・・・
お許してください。

【主な登場人物】

高石 守（59歳）：X市職員（自称ペット捜索探偵）

天見 千里：謎の女

湖論暮 啓司：堺署刑事（湖論暮ケイジ）

大小路 敏：和泉葛城山において白骨で発見される。

綾ノ町雄太：大浜公園ひょうたん池において死体で発見される、毒死。

白鷺 哲男：ミニコミ紙発行人

天見司朗：？

※ 槇尾山「蔵岩」殺人事件顛末記”（シリーズNO. 1）

<http://www.eonet.ne.jp/~tonbonome/makiotenmatuki.pdf>

※ 紀泉アルプス殺人事件”（シリーズNO. 2）

<http://www.eonet.ne.jp/~tonbonome/kisen.pdf>

大阪、山中に性別不明の白骨遺体

2×日午前9時15分ごろ、岸和田市大沢町の山中で、男性登山者（56）が遺体を見つけ、駐在所に届け出た。

岸和田署が2×日明らかにしたところによると、遺体は白骨化しており、ほぼ全身が発見された。死後かなりの時間がたっており、年齢や性別は不明。黒色のジャンパーと青色のジーンズ、白色のスニーカーを身に着けていた。同署は遺体の身元と死因を調べ、事件と事故の両面で捜査する。

俺は、意識を持つようになった。万物には秘められた力があるものだが、それは表に出すものではなく物と物との均衡をとるために、その力は存在しているようだ。自己の存在を誇示するためにあるのではない。

夏には灼熱の太陽の光線をともに受け、冬には冷たい北風を耐え忍んで、俺はそこに存在している。俺の多くの仲間が全国に散らばっているが、どれも俺と同じような境遇だ。

俺が人並みの意識を持つようになったのは、いつの頃だっただろうか。俺の上空に何とも言えない大きな積乱雲が発生するやいなや周囲が暗くなるほどの雨が降り注いだ。雷鳴が徐々に近づき、光の刃が大地に突き刺していた。そのひとつが俺を直撃した。

俺は、眠りから覚めた。眠りから覚めたというよりは、新しい命が誕生したと言っているのかもしれない。俺は、当初何が起こったのか分からなかった。様々な感覚が俺の中に注ぎこまれた。俺の五感が周囲の状況を確認した。どうやら俺の傍で一人の若い女が倒れているようだ。先ほどまで俺の体にタッチしていた女のようだ。先ほどの雷撃の巻き添えにあった様子だ。女の意識と俺の意識がリンクされた。こうして俺は摩訶不思議なパワーを獲得することになった。倒れていた若い女が覚醒した。何事pg.3

が起ったのか分からない様子だった。俺は、その若い女に言葉を掛けた。若い女は周囲をキョロキョロして声の主を探していた。俺は、優しくその若い女に再び声を掛けた。

若い女は、孤独な境遇だった。自分自身の心の空白を埋めるべく近隣の山々を彷徨っていた。俺は、この若い女の記憶の中に忍び込んだ。哀しい出来ごとの連鎖だった。俺自身も意識を持った存在として、同じような孤独を味わうとは想わなかった。

二

高石は、いい気持ちで湯船に浸かっていた。先ほど、山行から帰宅してビールを飲んだばかりだった。風呂上りに、もう一本ビールを飲み干そうと考えていた。暖かい湯の中で、こんな事を考えている時が一番の幸せだった。山登りも経験を積んでくると欲も出てくる。高石が考えていることは、「大阪環状トレイル」の踏破だった。とりあえずは、紀泉アルプス、犬鳴山、犬鳴山、和泉葛城山、和泉葛城山、鍋谷峠を歩いてみようと考えていた。頭の中に、昭文社の「山と高原地図」を浮かべて計画を練っていた。

そんな時に、風呂の引き戸を妻がノックした。すりガラス越しにコロコロンとした妻の体軀がぼんやりと見えた。

「お父さん、携帯に着信ですよ……どうします？」と、妻が引き戸を開けて言った。すでに妻の手には携帯電話が握りしめられているので、出るしかないではないか！と想いながら高石はシャンプーの泡が付いた手を急いでタオルで拭き取り、バスチェアに座りながら体を捻った。動きがまずかったのか腰部に激痛が走った。ぎっくり腰の前触れだ。おまけに受け取ろうとしている右肩は五十肩だ。こちらも何とも言えない痛みが走る。高石は、バランスの悪い姿勢で妻の手から携帯電話を受け取った。

「もしもし……高石ですけど。」と、高石は少々不機嫌な声で答えた。

「俺だ！」

「俺だ……と言われても……どちら様でしょうか？」

「君の雇用主である市長だよ。」

市長と訊くなり高石はバスルームの中で直立不動の姿勢を取った。慌てて起立した

ものだから右手で確かに握りしめた携帯電話がこぼれおちそうになった。

「市長！何の御用でしょうか。今日は土曜日で勤務は休みですし、台風も地震もありませんが……」

「高石君。俺の親父が和泉葛城山に行くと朝から出かけたのだが、この時間になっても帰宅しないのだ。」

「はあ……。」

「徘徊老人用のGPS機器をザックに忍ばせてあるのだが、追跡すると山頂の駐車場までの軌跡はあるのだが、後の行動が不明だ。」

「はあ……。」

「それでだ。決まった時間に帰ってこないのはいつものことなので、心配はしてないが……子どもとしての責任がある。親父も八六歳だからな……。」

「はあ……。」

「俺は、公務があつて明日は東京だ。どうせ親父は、麓の温泉に宿泊していると想う。念のためだ。明日の日曜日は和泉葛城山に行ってくれたまえ！安否確認探偵としての手間賃は支払うよ！」

「はあ……。」

「ぐずぐず考えるな！これは、職務命令だ！」と市長は半ば命令口調で懇願するように言うと一方的に電話を切った。

高石の体はすっかりと冷え切ってしまった。

「まあ……いいか！明日は、久しぶりに金剛山と想っていたけれど……。」と、高石は風呂場の引き戸を開けて携帯電話を脱衣籠に放り込んだ。

冷え切った体を湯風呂に付けると肩や腰の痛みがとろけていく感じがした。それにしても八六歳で山歩きをしている市長の親父が羨ましくなった。

「俺の体はいつまで動けるのかな……。——と、高石は痛みのある腰をマッサージしながら想った。

翌日、高石は日の出とともに起床した。朝刊を取りに玄関先に出たが、冬らしい寒さが寝起きの体を包み込んだ。

「防寒対策をしなければならぬシーズンとなったなあ……。——と、高石は考えた。朝食を簡単にすますと昨日の山行の装備にフリースを一枚突っ込んで愛車に乗り込

んだ。目指すは和泉葛城山である。

この山は、マイカーで行くことが出来る山である。紀泉高原スカイラインなる便利な道路を走行すれば楽に山頂まで到達することが出来る。ある意味面白みのない山とも言えるかもしれないが、山の楽しみ方は人それぞれだ。つまり登山とは、麓から登るという既成概念を否定すれば、山頂から麓に降って登り返すという方法もあるということだ。麓の登山口へ電車・バスを乗り継いで行くよりも効率的なのだ。

高石は考えた。おそらく市長の親父も気ままなルートを考えているはずだ。山頂から蕎原（そぶら）方面に降って、塔原からのルートで登り返しているかもしれない。それとも丁石道を降って麓の牛滝温泉の湯に浸かっているか犬鳴山温泉まで足をのばして同じく温泉の湯を楽しんでいるのではと推察した。

高石の愛車ノアは、山頂の駐車場に到着した。周囲を見回すとすでに二台の車が止まっていた。奥の方のスペースに市長から訊いていた軽の四輪駆動車が止められていた。手帳を取り出して、眼の前のナンバーと照合した。間違いなく調査対象者の車だった。中を覗くとGPS機器らしきものが運転席のシートに転がっていた。

冷たい朝の大気が新鮮だった。東方向から出た太陽が、それなりに高く昇り清澄とも言える朝陽を大地に降り注いでいた。高石は、山頂展望台あたりを適当に調査散策した後、駐車場出入り口前に戻って来た。鉄柵で遮断されている林道の脇を通り、針路を電波塔方面に向けて歩きだした。

まさか鍋谷峠までは行っていないと思うが念のため大石ヶ峰を経由して行ってみるか。——と、高石は考えた。

——あの山域でひっくり返っていたら、昨日からの寒さだと問題があるなあ……。ビッグ経験もある年寄りだと訊いていたけど……。俺も徘徊登山者だと自称しているが上には上がいるということか……。——

高石は周囲に気を配りながら決して焦らずにゆっくりと歩いた。歩いていることで、体感温度も汗をかかない程度に上昇している。時折に風が顔に吹きつけると寒さを感じた。本格的な冬の季節が到来すると想った。

——まあ……。俺にすれば、この冷たさは嬉しいけどね。俺の嫌いな長いものも土の中で冬眠しているはずだ。藪こぎするにしても安堵感がある。スズメバチも出てくるよ。

うなシーズンでもなさそうだし・・・。

―地図によれば、一等三角点があるはずだ・・・―と、高石は考えた。

(＊点名：葛城山 標高・865.68^m 所在地：大阪府岸和田市大沢町)

最近、高石は三角点探訪にハマっていた。本格的な三角点マニアと言えるものではないが、三角点に触れていると何とも言えない安心感が体内からこみ上げてくるのだ。自宅近所の四等三角点を地図閲覧サービス(ウォッチーズ)から探し出し、雑草で埋もれている三角点周辺を綺麗に掃除することに生き甲斐を感じていた。山登りを始めた頃は、山頂にある三角点を泥で汚れた登山靴で足蹴にしていたことを想起すると恥ずかしい。どうやら映画の「劔岳―点の記」を鑑賞してから心境の変化があったのだと想う。「三角点を踏む」ことは、「お天道様に石」する行為なのだと、最近は考えている。

左側にある建設省の電波塔を見上げながら、分岐に注意して緩やかな坂を登った。泥濘で登山靴が汚れないように足を運んだ。足元の地面ばかりを凝視していれば、見落とすような分岐があった。右に行けば、鍋谷峠。左に行けば、大石ヶ峰方面だ。ごろごろした石にバランスを崩させられながら高石は歩いた。右手に関電の鉄塔が見えた。緩い坂を一步步登ると一等三角点の所在を表す白い標識が見えた。賑わいのある山頂から少しばかり離れていることもあって訪れる登山者も少ないと想っていたが、タワー(鉄塔)下の一等三角点の柱石には、すでに先客がいた。右手で三角点の柱石を撫でるように触れていた。年の頃なら三〇代前半。端正な横顔を見ると知性が感じられた。が・・・陽射しの影響もあるが、憂いを秘めた影を大地に投影していた。こういう場合には、高石の直感は当たる。

―それにしても長いな・・・何かお祈りでもしているのか・・・―と、高石は訝った。

高石は想いあまって声を掛けた。「おはようございます!」

高石の声は澄み切っていた。相手に敵意や警戒心を与えるものではなかった。

「おはようございます。」と、女の方も挨拶を返してきた。山での相互挨拶は、「お互いに敵意は無いです。」というサインであった。

「えらく長い間、三角点に触れていましたね?」と、高石は疑問に浮かんだことを素直に訊いた。

「そうですね……。なんと言ったらいいのかわかりませんが、私……。変な意味で取らないで下さいね。実は、お話をしていたのです。」と、女は少しばかり笑みを浮かべながら言った。小さな可愛い笑窪を高石は確認した。

「凄い！美女だ！」と、高石は胸の高鳴りを抑えながら想った。

「誰と？誰もいませんよ……。まさか三角点と……。ですか？」と、高石は周囲を見渡しながら女に訊いた。

「そうです。」と、女は小さな声でこぼすように言った。

「へえ……。そう……。なんだ！」と、高石は感動を覚えながら言った。

「あの……。申し遅れました。私、高石守っています。一応素性の知れた公務員なのでご安心を……。」と、高石は動揺を抑えながら言った。とにかく美人をまともに正視すると血圧が上昇し、何を言っているのか分からなくなるのが高石だ。

「存じ上げております。高石さんの本当の素顔は、異能を持つペット搜索探偵でしょ。」と、女は三角点に触れながら明確に言った。

「どうして……。その事を……。三角点が喋るのですか？僕には聴こえない！」

「全ては、この三角点様から訊いたお話です。今も何か語っております。申し遅れました……。私の名前は天見千里といいます。」

「アマミ チサト さん……。ですか。」

高石にすれば夢を見ているようだった。早朝の和泉葛城山の頂で三角点と対話できるという謎の美女との遭遇。初対面なのに相手は、高石のことを知っているという事実。

「俺は、狐に化かされているのか……。―と、高石は想った。

「高石さん……。今日の朝刊を読みました？」

「一応……。目を通したけれど……。」

「昨日、このお山で人の白骨遺体が発見された記事なのですけど……。」

「読んだ！麓の樹林帯で発見された事件だね。」

「三角点様によれば、事件でも事故でもない。五年ほど前に自死した男の白骨遺体だと言っております。」と、天見千里は憂いを秘めた眼差しで哀しく言った。

その時に、高石の携帯電話が鳴動した。高石は、市長からの連絡だと思い慌ててザックを肩から外し、携帯電話を底の方から取り出した。ディスプレイを確認すると、

いつもの起床時刻にセットしたアラームだった。アラームを止めて周囲を見た。すでにあの若い美女・・・天見千里の姿はなかった。少しばかり視線を外した隙に天見千里は消えた。時間にすれば、三〇秒も経過していなかっただろう。

―幻視・幻聴の世界だったのだろうか。俺は、夢を見ていたのだろうか。携帯電話の鳴動で現実に取り戻されたのだろうか。―

高石は、聴き取った話を整理した。そして、天見千里が言った言葉、

「白骨・・・五年前・・・自死・・・」というキーワードを頭に叩き込んだ。高石には、これが現実だと言い切る自信はなかった。今までの人生でも、どこまでが現実で、ここからは夢想だという境界がない世界を彷徨っていた。高石は、ひよつとすると、この一等三角点が化身して先ほどの若い女が現れたのだと想った。高石は、眼の前の一等三角点に近寄り跪いた。そして、手袋を外して丁寧に両手で触れた。何かを期待して触れたものの冷たい石の感触だけが、高石の手に伝わるだけだった。和泉葛城山の一等三角点は、高石に何も語りかけなかった。

高石は、坂道を転がるように走った。急いで駐車場に戻ろうと想った。ひよつとすると、先ほどの女が居るかもしれない。鉄柵の前に来た時に、先ほどまで駐車していた赤色の普通乗用車が牛滝温泉方向の林道を降っていくのが見えた。ナンバーを確認しようと思ったその時だった。先ほどまで圏外だった携帯電話が鳴動した。ディスプレイを確認すると、昨夜新たに登録した市長からだった。

「高石くん！今、どこ？」と、市長の声が聴こえた。

「今、和泉葛城山ですが・・・」と、高石が何事か！という様子で応えた。

「すまん！すまん！親父から先ほど連絡があった。牛滝温泉に投宿していた。」と、市長はいかにも安心してきったかのような柔和な声を出した。

「そういうことで、ありがとう！」と、市長は簡潔に言々と、またもや一方的に携帯電話の通信を切った。

「なんじゃいなあ・・・くそたれ！」と、高石は呟いた。

結局のところ「堺」ナンバーで赤色の車・・・ということしか分からなかった。高石は、手にしている携帯電話を駐車場の地面に叩きつけようと思ったが、一瞬・・・妻の怖い顔が浮かんだ。かろうじて高石は自身の衝動を抑えた。

夕闇が迫る頃、高石は機嫌良く帰宅した。その後、ストレス解消のため山頂から、蕎原（そぶら）方面のルートを降り、しばし歩いて“塔原”からのルートを昇り返した。まだまだ時間的余裕があったが、むやみに歩くことも馬鹿らしくなって犬鳴山温泉の湯に浸かりに行くことにした。お陰で気分は爽快となった。

掘りこたつに足を入れて楽な姿勢で座った。ビールを飲みながらテレビを見た。アウンサーが神妙な顔で喋っていた。和泉葛城山の山中で・・・という言葉が流れた瞬間に高石の鼓膜はテレビのスピーカーに釘付けとなった。

「和泉葛城山の山中で人の白骨遺体が発見され・・・五年まえに失踪した住所、堺市堺区●●町・・・の大小路敏さんと判明いたしました。大阪府警・・・は、事件性があるかどうか捜査中とのことです・・・」

「なんと！天見千里が俺に言った「五年前」というキーワード・・・」と、高石は絶句した。所轄は、岸和田署になると思うが、住所が堺市堺区●●町となると湖論暮刑事の堺署だ。高石は、コップに残ったビールを一気に喉へ流し込むと携帯電話を握りしめ盟友である湖論暮刑事に電話した。

「おい！俺だ！高石だ。ニュースで流れている白骨遺体のことなんだが・・・」と、高石は早口で捲し立てた。

「おい！高石！ゆっくりと話すんだ。何を言っているのか分からんじゃないか！」と、湖論暮刑事は落ち着いて言った。

高石は、湖論暮刑事に和泉葛城山で謎の女から聴き取った話をした。

「自死だ！と言うのか・・・その女は・・・」

「そうだ！」

「今の状況では、事件性があるのかどうかは不明の段階だ。発見場所に落ちていたザツクの中に大小路敏の運転免許証があったことと当人の搜索願が五年まえに出ていること、そして、歯形の一致でもって断定してはいるが、ただなあ・・・」と、湖論暮刑事は最後の部分で言い淀んだ。

「ただ・・・なんだ？」と、高石は湖論暮刑事の中途半端な言い方に苛立った。

「今のところ、これ以上の事は分からない。しかし、その女は怪しいぞ・・・むしろ、この件と深い関わりがあるんじゃないか？」と、湖論暮刑事は周囲に居る同僚捜査員をはばかりのように小さな声で言った。

「そうかもしれない。俺は、あの謎の女を探すことにする!」と、高石は携帯電話の通信を切った。

湖論暮刑事にすれば、高石の情報は人に言えたものではない。「三角点と対話する謎の女」、むしろこの女がこの白骨遺体に何らか関与しているのではないかと推察してしまう。

―自死だと……。それも都合良く探偵である高石に告げるなんて……。今のところ一番怪しいのはこの女なのかも知れない。高石よ!探し出せ!俺は、お前のカンを信じるぞ!―と、湖論暮刑事は想った。高石に伝えていない事実があった。発見場所に落ちていたのはザックだけではなかった。鋭利な登山ナイフが、おそらく左胸に突き刺さっていたと推定できる状態で白骨遺体と共に発見されていた。

湖論暮刑事は、大小路敏の情報を集めることが先決だと想い直した。まずは一つ一つの事実を積み重ねていく必要があると想った。白骨発見場所は、他の管轄だが大小路敏は堺署近くに住んでいたのだ。

―大小路敏なる人物は一体どんな輩なのだ。―

三

―歩けば、酔いも醒めるかも……。―と、白鷺は想った。

白鷺哲男は、ほろ酔い気分で歩いていった。十二月に入るとお酒を飲む行事が増える。今日も南海本線堺駅近辺のホテルで業界の宴会があった。宴会が終われば、そのままタクシーに乗車して帰宅すればいいのに、この日に限って大浜公園を散歩しようと思った。

―とにかくアルコール効果で幸福度が高まるなら、良い事じゃないか。錯覚でも幸せならそれでいい!人生の幸福を感じる瞬間などは、そんなに多くはないぞ……。―と、白鷺は考えた。

さすが、夜ともなると気温は下がった。時間的には午後九時前でウォーキングを楽しんでいる老若男女がいた。いくら治安が良いといっても午後九時が限界だろうと想った。白鷺は、アルコールの臭いを周囲に撒き散らしながら散策しているが、やはり男の独り歩きは不審者だ。

メインゲートを通過して、乙姫橋の下を通った。胸のポケットから煙草とライター

を取りだした。禁煙区域かも知れないが、人通りが少ないので許されるだろうと想った。中央広場に出てひょうたん池に向けて歩いた。何気なく池の水面を眺めた時だった。何かが浮いていた。白鷺は目を凝らして注視した。

「何だ？あれは——と、白鷺は想った。どう見ても人だ。背中を上にながら半ば沈み込んでいた。手が届きそうな気がしたので、白鷺は池の縁に立った。座り込んで、手を伸ばすものの今少し足りない。白鷺が諦めて携帯電話で一一〇番を掛けようとした時に、

「誰だ？そこで何をしている？」と、きつい調子で誰何する者が二人近寄ってきた。懐中電灯の光が、まともに白鷺の顔を照らした。眩しいほどの明るさだった。手をかざして光を遮り、目を細めて見た。巡回中の老若コンビの警察官だった。若い方の警察官は、池の中を懐中電灯で照らした。

「何だ？あれは・・・」と言うなり、もう一人の老練な感じのする警察官は警棒を抜き出して白鷺に向かって言った。

「そこを動くな！」

若い方の警察官は、無線機を取り出して緊急連絡をした。

「救急車も呼んだ方がいいのでは！」と、白鷺は助言したが、若い警察官は怖い顔をして白鷺に言い放った。

「あなたは第一発見者かもしれないが、重要な参考人だ！逃げるなよ！」

「おいおい・・・俺は犯人でも容疑者でもないぞ！善良な市民だぞーと、白鷺は相手の誤解を解こうと想ったが、情況的には不利だった。善良な市民ならば、こんな時間帯に独り歩きなどはしない。白鷺は、自分自身の軽率な行動を恥じた。

睨み合いは三時間を経過しようとしていた。時計の針はすでに、一二時を過ぎていた。狭い部屋で白鷺は、湖論暮刑事と向かい合っていた。白鷺にすれば、過去の不始末で何度か幽閉された部屋ではあるが、今度ばかりはいつもと違って落ち着かなかった。白鷺自体の不審者風の振る舞いと、往々にして第一発見者が、犯人であることが多いという白鷺自身の経験則から、

「自分に嫌疑がかかっている。俺は無実だ——と、白鷺は冷え込んできた取調室の中で自身の魂が萎えてくるのを感じていた。

「先ほどから何度も言ってますけど、酔い覚ましで散歩をしていたら、たまたま発見

したんだ。それなのに、あの若い警官は、俺を犯人扱いしやがって！人権蹂躪だ！もう帰らしてくれよ。」と、白鷺は湖論暮刑事に懇願した。酔いはすっかりと醒めていた。

「あの後、救急車も捜査関係者も急行したけど、すでに死亡していた。死亡推定時刻は、白鷺が発見する二時間ほど前なので、白鷺が犯人だと言っている訳ではない。確かなアリバイもあるからね。ただ、何か見なかったかという点を確認したいと言うことだ。これは、俺の職務上の義務だからね。」と、湖論暮刑事は子どもを諭すように言った。

「俺は検死の内容も知らないし、池に浮いていたのが男か女かどうかも知らない。ましてや生きているのか死んでいるのかも知らない。」と、白鷺はどうとう駄々をこね出した。

白鷺と湖論暮刑事とは既知の間柄だ。もし死体発見場所が他の所轄だとしたら、白鷺は重要参考人として取り扱われてみっちり事情聴取されることになる。ひよっとすれば、被疑者として尋問されて適当な調書が作られ、あげくの果てに起訴されるかも知れなかった。

湖論暮刑事は、この白鷺から何も訊き出せないと覚った。湖論暮にすれば、この白鷺や高石は仲間だった。白鷺は、高石の探偵業をサポートしていた。湖論暮刑事にしても、この高石の探偵グループの協力で幾つかの難事件を解決してきた経過があった。取調室をノックしながら制服警官が一人入ってきた。白鷺は、その若い警官の顔を見ると一瞬の間、身構えた。ひょうたん池で白鷺を粗大ゴミの様に扱ったあの若い警官だった。白鷺の頭は、憤怒で燃えたぎった。吸い殻が入った銀色の灰皿を咄嗟に掴むやいなやその若い警官に投げつけようとした。白鷺の右腕は、すぐさま湖論暮刑事によって抑えられた。デスクの上に飛び散った吸い殻を片づけながら湖論暮刑事は叫んだ。

「こら！本当に逮捕するぞ！公務執行妨害だ！白鷺！」と。

若い警官は、白鷺の威嚇にもならない軽拳妄動に動揺もせず、湖論暮刑事に耳打ちをした。

「白鷺！無罪放免だ！高石がお前を迎えに来たぞ！」と、湖論暮刑事は笑みを浮かべながら言った。

白鷺は無然と若い警官に向き合うと、

「高石が身元引受人のようなものか・・・くそ！」と、悪態をついた。

湖論暮刑事は、白鷺を駐車場まで送った。高石を乗せたノアが停まっていた。

「高石！ご苦労さま！白鷺を自宅まで送ってやってくれ！犯人扱いされてかなり興奮気味だ。」と、湖論暮刑事は苦虫をつぶしたような顔で言った。

「ところで、高石！あの謎の女の所在は分かったのか？」

「まだだ・・・」

「そうか・・・状況を説明したいと想うので時間を取ってくれ！」

「捜査情報を部外者に流していいのか。」と、高石は冗談顔で言った。

「何をいまさら、俺は現職の刑事だけど立派な中高年探偵団の一員だぜ！お前も白鷺も俺の仲間だ！」と、湖論暮刑事は高石に言うのではなく白鷺に向かって言った。この言葉で少しばかり機嫌が良くなったのか、白鷺は湖論暮刑事に向かって丁重に頭を下げた。

四

湖論暮刑事は、高石達を見送った後自席に戻った。湖論暮刑事の頭に浮かぶのは、大浜公園内のひょうたん池で発見された男の死に顔だ。生前は何かのことで苦悶していたのだろうか、死に顔自体にもその事が感じられるほどに歪んだ顔をしていた。今のところ事件性があるかどうかは不明だが、所持品から身元が分かった。名前は、綾ノ町雄太。堺署管内に住所を有していた。所持品は、運転免許証の入った財布（所持金は、一万円札が5枚に小銭少々）と胸ポケットに小さな手帳があった。手帳には、湖論暮刑事にとっては意味不明なメモ書きがあった。水に濡れて判読し難いものであったが、何だか地名を列挙したようなものだった。

泉原山 寺山 岸和田 大野 佐野・・・

検死結果によれば、トリカブトによる中毒死だった。湖論暮刑事も捜査の合間に登山をする。トリカブトは良く見かける花だった。トリカブトと言っても約三〇種類の仲間がいるとのことだ。花の色も紫色、白、黄色、ピンクなどがある。登山をするも

のなら誰しもが一度は見ているはずだ。毒は根にあつて、漢方薬や毒として使用される。湖論暮にしても山で見かけた場合、その美しさには感動するが決して触れようとはしない。もし食べると、嘔吐・呼吸困難、臓器不全などが起こり死に至ることもある毒草だ。このトリカブトについては、テレビドラマなどではよくつかわれる物語の小道具となっている。青酸カリなどは、普通の庶民が手に入れようと想っても出来るものではない。しかし、このトリカブトなら日常的に登山をしない一般人でもたやすく採集できそうだ。町の花屋には、観賞用トリカブトまで販売されている。今やネット情報を検索すれば、核兵器まで製造できると言われている時代だ。毒を抽出することなど簡単な作業だ。

綾ノ町雄太の死亡推定時刻は、午後七時前後。この季節、日没時間は、一六時五〇分前後だ。周辺の聞き込みによれば午後四時頃、大浜公園の乙姫橋の下で綾ノ町雄太と女が言い争いをしている光景を目撃したカップルがいた。この目撃談によれば、公園内を周回して元の乙姫橋に戻ってくると女の姿はなく、綾ノ町雄太一人がぼつねんと立っていたとのことだ。女の年頃は、綾ノ町雄太より年下に見えたという。綾ノ町雄太の年齢は、三五歳。働き盛りの年齢だ。別の目撃者によれば、夕闇迫る頃に大浜公園内のベンチで物想いに耽るかのように身動きせずと考え込んでいた綾ノ町雄太がいた。時間的な経過で言えば、女の関わりは否定される。

いずれにしても午後四時から七時までの三時間ほど綾ノ町雄太は、何を考えどのように行動したのだろうか。

―別れ話がこじれて、絶望のあまり死を選んだのか・・・それとも、新たなトリカブト殺人事件か・・・と、湖論暮刑事は推理した。壁に掛けられた時計を見ると、午前一時を過ぎていた。湖論暮刑事は、両腕を組んだ。そして、足を机に投げ出して、仮眠を取るべく眼をつむった。いつのまにか雨が降っているようだ。雨滴が窓ガラスを叩いていた。寂しくも哀しい音だった。

翌日、高石は休暇を取った。あの謎の女、天見千里を探すためだ。幸いなことに、雨はあがっていた。高石には、きつとどこかの山で再会出来ると言う確信みたいなものがあった。高石は、昭文社の地図を広げてどここの山に行くか検討した。天見千里もどこかの山の三角点巡りをしているのに違いないと想った。三角点は、高い山々だけにあるものではなく、自宅近所にも存在していた。天見千里を探すために山だけに行

くというのは、効率の良いものではない。手掛かりは堺ナンバーの赤色の車だけだった。

高石は秘かに自分なりの「大阪環状トレイル」踏破を計画していた。今のところ岬公園駅（孝子駅）から山中溪駅の間「紀泉アルプス」、鍋谷峠から横尾山、横尾山から二上山（ダイヤモンドトレイル）は踏破していた。昭文社の「山と高原地図」でいえば、山中溪駅近くにある四石山から犬鳴山、犬鳴山から和泉葛城山、和泉葛城山から鍋谷峠が未踏破だった。縦走となるとマイカーでは不都合だった。電車やバスを利用しないと実現できない。高石は、入念に各ポイントでのバス停留所の時刻表を印刷していた。

高石は、四石山を経由してお菊松、余裕があればササ峠まで、更に余裕があれば城ヶ峰を通過して三峰山、犬鳴山へと考えた。コースタイムを足しこんでいくと一日では無理だと想った。今の季節、日没時間が早い。高石は、二分割で行こうと想った。地形図を見ると、結構なことに三角点が点在していた。あの謎の女、天見千里と遭遇できるかどうかは不明だが、

―俺も・・・ひよつとすれば三角点と意思が通じ合うかもしれない・・・―と、高石は妄想にも似た思考に落ち込んだ。

平日の山行だと人と遭遇することは滅多にない。誰とも会わないことで、かえって不安ではあるが、怪我さえしなければ贅沢な時間が過ごせた。歩いていると何も考えない空白の時間帯となるが、突然と閃くことがあった。謎解きには絶好の瞬間だった。

高石は、山中溪駅に向かうことを決めた。

―まずは、四石山だ！―と、高石は小さな声でひとりごちた。

五

誤解のないように説明しておく必要がある。

俺達の全てが意識を持っている訳でないのだ。俺達は、あの女と接触することで命が与えられるのだ。俺達は、その女と対話をする。あの女は、行く先々で仲間を増やしていた。

一度の雷撃で獲得した能力だが、あの女は何かを俺達に求めている。どうやら、過

去の出来事の真実を求めているようだ。俺達は、俺達が見聞したことをあの女に伝えていた。俺達は、あの女の哀しみを消すことは出来ない。しかし、同情することは出来た。

自由に動くことが出来ない俺達だが、様々なことを目撃している。意識を与えられることによって、それまでの過去がよみがえるのだ。そして、意識を与えられた俺達は、仲間として徐々に繋がっていった。ネットワークが構築された。まだ、点と点との繋がりはあるが、俺達はあの女の孤独を引き受ける換わりに、俺達は個々ばらばらな存在ではなくなった。孤塁を守ることは、名譽なことではない。今日もどこかで、急に意識を持たされて狼狽している仲間が歓喜と恐怖の混じり合った言葉を発信している。

事態は何の進展もなく数日がたった。

せっかくの土曜日だったが、高石は寝坊をしてしまった。睡眠を取り過ぎると腰痛がぶり返した。予定では、「大阪環状トレイル」を繋ぐために前回お菊松で中断した泉南の山を歩こうと想っていた。JR駅新家駅から再度、お菊松を通過して犬鳴山温泉までである。高石は、空いた時間を無為に過ごすのはもったいない気がして、近所の公園巡りのポタリングに計画を切り替えた。

夕方には、堺東にある白鷺事務所へ行く必要があった。白鷺の憤りはすでに醒めてはいたが、湖論暮刑事と会う必要があったからだ。この日、十二月十日は、月全体が地球の影に隠れる「皆既月食」が見られるとのことだ。日本全国で欠け始めから終わりまで全過程を見ることが出来る絶好の機会だった。夜の八時半過ぎから半影食が始まり、一時過ぎから皆既食が始まる。皆既食の最大は、一時三十分である。おそらく白鷺事務所の窓から見る事が出来ると想った。

堺東の白鷺事務所には、すでに湖論暮刑事が先に到着していた。白鷺と湖論暮刑事は、白鷺の執務室のソファーに向かい合って談笑していた。すでにアルコールが入っている白鷺だった。ほんのりと桜色をした顔があった。

湖論暮刑事は、入口のドアを開けて入室してくる高石の姿を見るなり言った。

「どうだった？会えたのか、彼女に・・・」

「四石山から金熊寺、お菊山そしてJRの新家駅まで歩いたけど・・・成果はありま

せんでした。」と、高石は両手で×サインをしながら白鷺の横に座った。

「高石！お前も呑め！今日は俺の出所祝いだ。」と、白鷺は日本酒の入ったコップを高石の目の前に置いた。

「そうだな・・・今日は、絶好の月見酒だ。少々寒いけど、白鷺よ！窓を開けてくれ！」と高石は言った。

「今、開ける必要はないよ。見どころは午後一時からだ。まだ、充分に時間はあるよ」と、湖論暮刑事は微笑しながら言った。

「そうだ！寒いのは嫌だ！あの取調室も寒かった。」と、白鷺。

「取調室じゃないよ！事情聴取室だ！白鷺！」と、湖論暮刑事はやり返した。

「同じようなものじゃないか！」と、白鷺は食い下がった。間に入るような形で、高石は言った。

「まあ・・・まあ・・・ご苦労さまでした白鷺！」

「ところで、綾ノ町雄太の捜査は順調に進んでいるのか？湖論暮」と、白鷺は真顔に戻って言った。

「何しろトリカブトなんでね。訊き込みによる目撃情報では、綾ノ町雄太は、午後四時から七時までは一人で大浜公園にいた。日没は、午後五時前から始まるので目撃者の証言も曖昧なものとなるが、ほぼ間違いなく綾ノ町雄太は一人だ。その前に、綾ノ町雄太より歳若の女と言い争っている光景が目撃されているが、こちらも今のところ捜査中だ。現時点では、名乗って来ていない。遺留品だが、月並みなものばかりだ。運転免許証の入った財布、と多少の現金、そして水分を含んでふやけた手帳だ。トリカブトそのものは見つかっていない。トリカブトを入れていたと思われる容器や薬包紙については、鑑識が周辺を調べたが発見されていない。」と、説明しながら湖論暮刑事は書類袋から手帳のコピーを取り出した。

「あるとしたらこの手帳のコピーだが、意味が分からん！」

「綾ノ町雄太の自宅は調べたのか？」と、白鷺が言った。

「綾ノ町雄太は、独り者だ。親が残した不動産を売却して気ままにマンスリーマンション暮らしだ。定職はない。気ままな独身生活だ。管理人の許可をもらって、部屋を調べたが・・・これと言ったものはなかった。」

湖論暮刑事は、高石と白鷺の前に手帳のコピーを提示した。

水分を含んだふやけた手帳に書き込まれた字は、歪んでいた。高石は、コピー用紙を

手に取り、メモを読んでみた。地名か山名だと推測された。どこかで見たような記憶がよみがえってきた。

泉原山 寺山 岸和田 大野 佐野……

「湖論暮！これは、点名だよ！それに間違いがない……。」と、高石は自身たつぷりに言った。

「てんめい……天名……店名ってなんだ？」と、白鷺が質問した。

「点の記……三角点の名前だ！」と、高石は答えた。

「三角点に名前があるのか？」と、湖論暮。

「一つ一つにあるよ」

「何故こんなものを持っているんだ？」と、湖論暮は高石の顔を見ながら言った。

「被害者かどうかは不明だが、綾ノ町雄太は……どうやら三角点マニアか登山が趣味な人間だ！」と、高石はコピー用紙のそれぞれの地名らしきものに指を当てながら言った。

「綾ノ町雄太のマンションには、山道具があったぞ！」と、湖論暮。

「三角点マニアは、山好きとは限らない。我々は、三角点と言えば、高いお山にあるものだと考えるが、自宅近所にも三角点はあるんだ。あるものは、地下にあるし、あるものはマンホール蓋型と言うものもあるぞ。」と、高石は最近、学習した知識を説明した。

「へえ……つ……。」と、白鷺と湖論暮はまじまじと高石の顔を見た。

「おい！湖論暮！」と、高石は自らも驚くような声で言った。

「何だ！高石！」と、白鷺と湖論暮は同時に叫んだ。

「大浜公園に一等三角点がある。蘇鉄山だ！」

「何で大浜公園に山があつて一等三角点があるんだ！」

「盛土で造った山でも、人が山と呼ばば山なんだ！一等三角点も高い山にだけあるんじゃないんだ！」

高石の三角点講義が、この後延々と続いた。どうやら高石は、三角点に特別な感情を持っているらしい。話を訊いてみると、何だか宗教の講話のようだった。高石の話によれば、三角点を大切にすると、きっと「何か良い事があるらしい」。

いつしか湖論暮も酒を呑みだした。捜査のための会議なのか宴会なのか境界がなくなった。時刻は、午後一時を過ぎていた。白鷺は、ふらふらと立ちあがると自ら執務室の窓を開け放った。冷気が勢いよく吹き込んできた。アルコールのお陰で、これぐらいの寒さなら耐えられるのだろう。三人は、窓から顔を出して、空高い月を見た。何とも言えない美しい月があった。午後一時半過ぎには、幻想的な赤い満月となった。

白鷺が言った。

「生まれて初めての不思議な体験だ……」

「俺もだよ！白鷺！これこそ、本当の月見酒だね。」と、湖論暮。

高石は、日本酒が溢れるばかりに入ったコップを手に取り、妖しいほど綺麗な月を見た。

——この世には、不可思議なことがあるから面白いのだ。今多くの人間が空を見上げてはいるが、皆既月食の理屈について正確に説明できる人間なんて少ないよな……。太陽、地球、月が順に一列に並んだ時に起きる天体現象だと言われても、何でそうなるのか？誰も説明なんかできやしねえ……。俺は、信じるぞ！三角点と対話できる天見千里を……。天見千里に会えれば、この二つの出来事は解決する……。——と、高石は想った。すでに酔いがまわった状態であったが「何か良い事」が起こりそうな気がした。

六

湖論暮刑事のもとに様々な捜査情報が集約されてきた。和泉葛城山において白骨遺体で発見された大小路敏の交友関係を捜査していると、綾ノ町雄太の名前が浮上した。大浜公園内のひょうたん池で毒死した綾ノ町雄太である。二人は、何者かによって殺された可能性があるのだろうか。大小路敏は、五年前に登山ナイフを胸に突き立てられ、綾ノ町雄太はトリカブトによって毒殺された……。あるいは、大小路敏は、綾ノ町雄太に誘われ和泉葛城山に登った。綾ノ町雄太は、隙を見て大小路敏の胸に登山ナイフを突き刺した。そして、五年後に罪の意識から綾ノ町雄太は自死した。それとも、別の第三者が二人に対する何かの恨みで殺した。いずれにしても人を殺すには、動機がいる。

そして気になることがあった。高石が追っている天見千里だ。三角点と対話する謎の女。しかしながら科学捜査を基本とする警察だ。世迷言のような話は捨象すべきなのだ。

―確かに、俺は高石の探偵能力は認めるが、非科学的な話にはついていけない。初対面の天見千里が、高石のことを知っていることもごく自然なことだ。何故なら、高石は探偵としての実績を積んでいた。今や、ネットの世界で「異能を持つ探偵」として、ご丁寧にも写真付で流れていた。俺は事実しか信じないぞ!―と、湖論暮刑事は何度も何度も自分に言い聞かした。

湖論暮刑事の推理は迷走した。結局、大小路敏や綾ノ町雄太の事は何も分かっていなかった。ただ、現場の共通性は一等三角点のある「山」で死んでいるということぐらだった。このことは、高石から教示されたことだが……。そして、二人の接点は、山仲間であるということ。学生時代から二人は自宅が近いということもあって意気投合しパーティーを組んでいた。周辺情報を訊き込んで分かったことは、二人はある日を境にして突然と登山パーティーの関係を解消した。それは、今から六年前だった。大小路敏の失踪は、五年前だ。二人において、六年前に何があったのだろうか。

―山仲間が突然とパーティーを解消するには、強烈な理由があるはずだ。―という想いが湖論暮刑事の頭をよぎった。何かが起こったのだらう。一連の出来事を貫く何か……。

湖論暮刑事は、居ても立ってもいられなくなった。上司に報告する前に埋もれた事実を発掘する必要があった。ロッカーから防寒服を引っ張り出すと、堺署を飛び出した。湖論暮刑事にむかつて寒風が吹き付けていた。背中を丸めながら歩いた。立てた襟の隙間から一二月の風が吹き込んだ。睡眠不足の体には、結構堪える冷気だった。信号待ちで立っているのも辛い寒さだった。眼の前をチンチン電車が、寒さで縮んだ湖論暮刑事を勇気付けるように力強く走りすぎた。大小路敏の実家は、すぐに分かった。五年ぶりに発見された息子の葬儀を終えた後だったこともあって、いくらか安堵の表情をした両親と面会できた。

玄関先で湖論暮刑事は、警察手帳を提示した。

「すいません。堺署の湖論暮です。」と、丁重に挨拶した。

「寒いのにご苦労さまです。息子の敏の件で何か分かりましたでしょうか？」と、老いた母親が先に訊いた。老いた母親の表情は、たとえ白骨遺体でも自分が生きている間に息子と再会できた喜びがあった。五年という歳月が流れる中で、親としての意識は変遷したのに違いない。希望と諦めが交差した五年だったのだろうか。

「お母様……。ご子息と綾ノ町雄太さんとは山仲間でしたか？」と、湖論暮刑事は老いた母親の質問に答えるのでなく単刀直入に訊いた。

「そうです。雄太さんとは同じ年ということもあって、仲の良い友人でした。それなのに、敏の遺体が発見されたという時に死んでしまうなんて……。」と、言い淀んで老いた母親は目がしらを押さえた。

「綾ノ町雄太さんは、ご子息のことで何か語っていませんでしたか？」

「いえ、何も……ただ、敏は不思議なことに六年ほど前から、何とこのうか……心の病というのでしょうか……精神に変調をきたすようになったのです。最初の一年ほどは、私どもも気がつかなかったのですが、夜中に突然と叫び出すようになりました……。」

母親は想い出すことさえ辛いのか、傍らにいた夫に助けを求めるような視線を投げた。父親の顔は、これ以上訊いてくれるな……という苦しそうな表情をしていた。母親は立ち上がって奥の部屋に戻った。湖論暮刑事も自然と視線がそちらの方に向いた。小さな仏壇があった。母親は、仏壇に向かって合掌すると、仏壇横にある本箱から五冊のアルバムを取り出し丁寧に風呂敷に包みこんだ。老いた母親は、不自由な足を庇いながら、再び夫の傍に座ると、夫の同意を求めるような表情をした。長く連れ添った夫婦には、言葉は要らなかった。

「……。」

夫の表情には、とうとう……来るべきものが来たというような諦めが感じられた。

湖論暮刑事は、この老いた夫婦を見つめながら想った。

——この老いた両親は、全てのことを知っている。——と、湖論暮刑事は想った。鋭い痛みが、湖論暮刑事の胸を貫く。触れてはいけないものに触れてしまったのだ。一人息子を失った悲しみは、老夫婦の未来を奪ったのだ。「ただただ静かにしておいてくれ！」という想いが、父親の哀しい顔に現れていた。

「湖論暮刑事さん……。これは、息子の山行アルバムです。何かの参考になると想

います。これで勘弁してください。」と、父親は絞り出すような声で言った。

「……………」

湖論暮刑事は、何も言わないと決めた。何か言葉を発する度に、この老夫婦を害することになると想った。言葉は時に致命的な暴力となる。

—このアルバムから全てを推察せよ……—と言うことなのだ。

湖論暮刑事は、先ほどまで猫背のようになっていた背筋をピンと伸ばした。奥の部屋の小さな仏壇に向かって合掌した。老夫婦に深々と頭を下げると、風呂敷包みを持った。ずつしりと重いアルバムだった。大小路敏の二九年の人生が詰まったアルバムだった。

帰りざま、老いた母親は耐え忍んでいた緊張感が切れたのだろうか、泣き崩れた。その背中を抱くようにして夫は妻を支えていた。湖論暮刑事の目がしらが熱くなってきた

堺署に戻った湖論暮刑事は、自分のデスクの上に風呂敷包みを置いた。風呂敷包みの結び目を解いた。大小路敏の登山アルバムだった。一枚一枚の写真には、撮影場所と撮影時間が性格を表すような几帳面な小さな字で書き添えられていた。湖論暮刑事は、一番古い記録から順々に写真を確認していった。湖論暮刑事にとっても懐かしい山々だった。北アルプスや南アルプスの山頂踏破の記録だった。セルフターマーで撮影したのであろう、二人の男が得意げに三角点を踏んでいる写真だった。大小路敏と綾ノ町雄太の日焼けした顔が印象的だった。湖論暮刑事は、一枚一枚丁寧に確認した。三冊目のアルバムの途中から撮影場所は全国に点在するようになっていた。そして、いつしか三人の若者の顔が並ぶようになった。新たに登場した若者の顔が写り込んだ写真を凝視した。精悍な顔をしていた。歌舞伎俳優だと言っても良い面構えだった。女なら絶世の美女だろう。

四冊目のアルバムには手作りの押し花が挟まれていた。花の色は、紫色だった。どこかで見た花だと湖論暮刑事は想った。

—トリカブトだな……山中で採集したものであれば、不謹慎な—と、湖論暮刑事は想った。大小路敏が、自分で採集したのかどうかは不明だった。山の経験の浅い若い女が興味本位で採集し、押し花にしたものなのかも知れない。予断と偏見は厳禁だ。それにしてもトリカブトの押し花が出てくるなんて……偶然にしては、気になると

ころだ。

—このアルバムに何が隠されているのだろうか—と、湖論暮刑事は考えた。

大小路敏の記録は、六年前で途絶えていた。六年前に何かが起こったのだ。湖論暮刑事は、山においては単独行を好む。捜査においても単独捜査を好む。度々、上から押し付けられる捜査方針に疑義を唱え、署の上司からは煙たがれていた。湖論暮刑事が捜査から外されないのは、実績があるからだ。高石等の中高年探偵団との絶妙な連携は、大阪府警のトップにおいても黙認状態だった。

湖論暮刑事は、六年前に何があったのか、かたばっしから調べることにした。まずは六年前の新聞雑誌の類からだ。大きな特異な出来事であれば山岳雑誌に記事として掲載されているかも知れない。湖論暮刑事は、同じ堺区内にある図書館に電話を入れた。六年前の各社の新聞と山岳雑誌関係の資料があるかどうかを確認した。湖論暮刑事は、逸る心を鎮めるために大きな深呼吸をした。

湖論暮刑事の目の前に、日焼けした三人の若者がはち切れそうな笑顔で三角点を踏んでいる写真があった。大小路敏と綾ノ町雄太、そして今は名も知れない若者であるが、この若者の所在を確認する必要があった。大小路敏と綾ノ町雄太とを結ぶこの若者こそが一連の出来事の謎を解くキーマンであると湖論暮刑事は確信した。湖論暮刑事は、アルバムからこの写真を丁寧に剥がした。皺や折り目が付かないように、大きな手帳に挟みこんだ。

湖論暮刑事のデスクに、ブラインドの隙間から通り抜けた西日があたっていた。光が当たったところが輝いていた。光輝くところは周囲から浮かび上がっていた。はつきりと明暗を分けていた。

—闇に隠れた真実は、誰かが光を当てれば世の中にさらけ出されるのだ。—と、湖論暮刑事はふつふつと湧きあがってくる闘志を体全体で表現すべく椅子から勢いよく立ち上がった。周りにいた同僚が湖論暮刑事に何事が起こったのかとびくりし、お互いの顔を見合わせていた。湖論暮刑事は、上司に出かける！という意味を込めた会釈をすると、大きな足音を立てて部屋から出て行った。

あれはいつのことだったろう。一人の女が細い足で、喘ぎながら近寄ってきた。相当に無理をして登ってきたのだろう。女は俺の前に跪いて両手で俺を優しく包み込んだ。暖かい手の温もりが伝わってきた。漆黒の闇といってもいいぐらいの世界で、俺は何も感じないで存在していた。灼熱の暑さも凍りつくような寒さも感じない世界だった。女は、俺に囁く。目覚めなさい・・・と言っているようだ。

―揺り起さないでくれ！俺は眠っていたいのだ！―

女は、俺に問いただしていた。あの時の出来事を一部始終・・・語ってくれ・・・と。

突然と俺に意識を与えた女は、泣いていた。俺にしても迷惑な話だった。俺の意識の中に、別の俺の仲間の声が飛び込んできた。

「知っていることを話してやれ！」

一体のところ何が起きているのか、俺には当初分からなかった。徐々に時間が経過するにつれて、理解が出来た。この意識というのは、この女と会話する能力なのだと想った。一木一草にも溢れんばかりの魂がある。万物には、魂があるのだ。

俺は、おそらくあの時の出来事のことを言っているのだろうと想った。俺は、自分の身の回りで起こっていることについては知っていた。俺は、女に全てを語った。女は、泣き崩れ、俺に抱きつくように覆いかぶさった。

湖論暮刑事は、図書館から借用した各紙の新聞と山岳雑誌をデスクの上に積み上げた。そして、しらみつぶしに調べた。鬼気迫る湖論暮刑事の顔つきを見た周囲の同僚捜査員は驚いた。

―また、何かにとり付かれているぞ・・・―と、湖論暮刑事の上司が不安げな表情をしながら覗き込んでいた。

―六年前に何かが起こったのだ。―

湖論暮刑事の眼にひとつの記事が眼に飛び込んできた。

六年前の遭難記事だった。五月の連休中に南アルプスで三人の登山者が遭難し、一人

は凍死した事件だった。記事では、大阪の三人のパーティーが急な天候不順で前進が阻まれ、ビバークするも暴風雪のため停滞を余儀なくされた。予定日になっても下山しないので家族が地元の県警に救助依頼した。二次遭難の恐れもあったので天候の回復まで救助活動は延期された・・・などと記述されていた。遭難者の氏名と住所があった。

大小路敏（二九歳） 大阪府堺市・・・

綾ノ町雄太（二九歳） 大阪府堺市・・・

天見司朗（二九歳） 大阪府河内長野市・・・

―アミ・・・アミ・・・シロウ・・・―と、湖論暮刑事はアミという名前を自身の記憶から探し求めるために名前を何度も反芻した。

湖論暮刑事は、手帳に挟んでいた写真を取りだした。三角点を仲良く三人組の若者が、得意げに踏みつけている写真だった。左から大小路敏、天見司朗、綾ノ町雄太だった。氏名不詳の日焼けした若者の名前は、天見司朗。そして、唯一の死亡者だった。

湖論暮刑事は、経験していた。五月といえども、標高二千m以上の南アルプスは、時によっては天気が崩れ積雪を伴うほど吹雪くことを・・・登り始めの麓は、太陽の陽光が燦々とし、ぽかぽか気分でも一旦天気が荒れると別世界となる。湖論暮刑事にしても日没迫る時に、横殴りの雪が吹き付け、前方の視界も閉ざされる中やっと無人小屋に辿り着き、板戸を無理やり開けて小屋の中に転げ落ちるように飛び込んだことを・・・

山を舐めて軽装備で食糧も持たず山行すると、とんでもないしっぺ返しがある。

五月の南アルプスで一体何があったのだ。この三人に・・・

天見司朗は、六年前に遭難死。大小路敏は、五年前に失踪し和泉葛城山において白骨遺体で発見。綾ノ町雄太は、大浜公園で毒死。関係者全員が死亡していた。そして、この遭難事件の後、大小路敏は精神の変調をきたしたと言う。パーティーは解散。個々に山行があったとしても、そう簡単に山行できるものではないはずだ。遭難死を伴う山行があった場合に、すっぱりと山行を止める登山者もいれば、今までと同じく山行するものもいた。両者の意識の分水嶺は何なのか・・・湖論暮刑事には不明な世界だった。

―例えば、俺が家族と一緒に山行して誰かが死亡すれば、きっぱりと俺は山を止める。俺は生きていけないだろう。しかし、これが高石だったら俺はどうするだろう。―と、湖論暮刑事は考え込んでしまった。

湖論暮刑事は、手帳に天見司朗の氏名と住所をメモした。天見司朗の家族と会う必要があった。

高石は、書斎でお湯割り焼酎を舐めながら、かつて古本屋で買い求めた「山と溪谷社」の「一等三角点百名山」（昭和六三年）のページを広げていた。一等三角点の設置場所は全国でおよそ千ヶ所ほどあるとのことだが、山型・展望・知名度を物差しにして千メートル以上の山を全国から選んだものだ。深田久弥が選んだ「日本百名山」とはまた違うものだ。

近畿地方では、伊吹山・金剛山・山上ヶ岳・釈迦ヶ岳・冷水山・氷ノ山が選ばれているとのこと。この「一等三角点百名山」の完全踏破を目指す老若男女の登山者が、結構いるとの話を訊くと驚くばかりだ。高石にすれば、とんでもない目標だった。自分なりの「大阪環状トレイル」の踏破もいつ達成できるか不明だった。高石にすれば、いつかは行くことになるはずの山々の写真を眺めるだけで充足感が得られた。

それにしても気になるのは、天見千里のことだった。そのうちどこかで再会できると思うが、

―そのうちでは遅いのだ。すでに一等三角点が設置されている近辺で二人の男が死んでいる。事件性があるのかどうか不明な状態だ。大小路敏は、遺留品があったからこそ身元が確認できた。死体遺棄なら、何から何まで証拠を消滅させて処理するだろう。事件性がなくて身元不明なら行旅死亡人だ。―

そんな取り留めのない事を考えていると、階下から妻の声が聞えた。

「お父さん！もう八時ですよ！明日は人間ドックでしょ！絶飲！絶食！ですよ！」

「はい！ハイ！」と、高石は機嫌の良い返事を階下の妻に返した。そして、残りのお湯割り焼酎をぐいと呑みほした。

明日は、人間ドックの受診予約をしていた。長引く腰痛の原因が内臓からの危険信号であると推測していたからだ。何事もなければいいが、もう少し働きたいと想っていた。近くの市民病院は予約者がいっぱいなので、受診予約が出来なかった。しかたがないので、大阪市港区の健診機関まで足を運ぶことになった。それともう一つの目

的があった。それは、天保山の二等三角点を確認することだった。

とにかく「日本で一番低い山」として、天保山（標高4.53m）はそこにあった。

母親の胎内にいる赤子に意識があるのかどうかは、俺は知らない。今の俺は、ちょうどそんな状態なのかもしれない。眠っている訳でもない。まず俺が俺であることが分らない。しかし、どこからか遠い声のようなものが聴こえてきた。

「俺を眠らせておけ!」と、何度も叫んだような気がする。声というか信号がだんだんと強くなってきた。どうやら俺の仲間のようなのだ。俺に仲間が存在することさえ俺は知らない。仲間達は叫んでいた。

「もう終りにしろ!俺達は元に戻るのだ。無という平穏な生活に戻るのだ。そのためにお前を覚醒させる。起きろ!起きてくれ!」と、俺の仲間という奴等が異口同音に叫んでいた。

「もうすぐ一人の男がお前の元にやってくる。そいつは、お前の姿を撮影し、お前に触れるだろう。その瞬間に男に伝えよ!その男が事態を正常に戻す。俺たちには、意識なるものは要らない。俺たちは、ただ静かにそこにあるだけでいいのだ。俺たちには、孤独感などという感情や哀しみも必要のない存在なのだ。」

高石は面談室で医師から検査結果を訊いていた。医師は慎重に言葉を選んで説明をしていた。

「高石さん!この検査では異常は認められませんよ・・・。」と、検査結果の数値を見ながら言った。

「この検査では?ってどういう意味よ?うまいこと責任を回避しているぞ・・・と、

高石はひとまず安心はするものの医師の物言いに不安感を覚えた。

「すこし貧血ぎみですね・・・」

「はあ・・・昨日に四〇〇ccほど献血しましたから・・・」

「そうですか!尿酸値が高いのでアルコールは控えて下さいね。」と、医師は高石が書いた問診票の酒量欄を確認しながら言った。

いずれにしても高石の健康には問題なさそうだった。高石は、清算時に貰ったお食事券をもって近くのホテルに足を運んだ。ランチバイキングだった。高石は、医師の忠告も忘れて生ビールの中を頼んだ。ほろ酔い気分で、三角点探訪に行くつもりだった。

高石は、昨夜からの絶飲絶食状態から解放されて、しごく幸せな気分だった。地下鉄の券売機で大阪港駅までの切符を購入した。大阪港駅の改札口を出て、階段を降りた。しばらく歩いて空を見上げた。大きな飛行船が空を泳ぐように飛んでいた。そして左側に視線を変えると大きな観覧車がゆっくりと回転しているのが眼に入った。横断歩道を渡って目的地を目指した。目的の天保山公園は、すぐそこだ。公園の入り口をしばらく進むとコンクリの階段があった。そばに大きな登山道の標識があった。天保山登山道の案内ということでアップダウンルートと東ルートが紹介されていた。いずれも山頂まで一八〇mとなっていた。

高石はアップダウンルートを選択し階段を登って行った。大きな記念碑の横に、それはあった。

―案内の看板がなければ見落としてしまうな・・・―と、高石は足元の埋設された三角点を見た。

高石はバッグからコンデジカメラを引っ張り出した。三角点周辺の風景をコンデジカメラで撮影すると、タッチしている場面も撮影しようと想って、三角点に触れた。その時だった。左手の中指から電流のようなものが流れた。それは、おそらく落雷時と同じような強さだった。もつとも高石は、落雷を受けたことはない。高石が記憶しているのは、ここまでだった。

皮靴の底から煙をだして、大の字になって倒れている高石をたまたま発見したのは、公園に散歩に来ていた親子連れだった。すぐに救急車が天保山公園に到着し、高石は近くの救急病院の集中治療室に運びこまれた。（どうやら山岳救助隊は出動しなかったようだ。）

医師は、衣服が剥ぎとられた高石の体を見た。電流が左肩から頭と胴に枝分かれして流れたような赤い痕跡があった。高石の頭頂部の髪の毛も焦げて禿げていた。左手と両足には火傷が生じていた。医師は、これは落雷の直撃だと判断したが、今日は見事な快晴で雷鳴などは誰も訊いていなかった。念のため内蔵チェックしたが異常はな

かった。高石は、深い眠りの中にいた。

「高石・・・危篤！」と言う知らせは、すぐさま堺署の湖論暮刑事にも連絡された。

高石は、集中治療室から一般の病室に移った。高石は三日三晩の間、眠りこんでいた。まるで映画のように次々から映像が流れていく。高石にすれば得体の知れない何かが次から次へと言葉を吹き込んでいく。どうやら南アルプスの光景だろうか・・・三人の若者が雪と闘っていた。白色が絶望の色となっていた。三人は、風を避けるために稜線を避けて尾根の下の方でテントを張った。テントを吹き飛ばすような風と三人の若者は闘っていた。テントの中で三人の若者が体を寄せ合って体温が少しでも逃げないようにしていた。じわじわと足元から冷気があがってきた。大小路敏の顔が脳裏に浮かんた。新聞に掲載された写真と同じものだ。そして、同じく新聞に掲載されていた綾ノ町雄太の顔が続く・・・。

ベッドの上で眠り込んでいる高石の寝顔を見ていた湖論暮刑事は、高石の表情が一瞬！歓喜の顔をしたことを見逃がさなかった。

―何の夢を見ているんだ！高石―と、湖論暮刑事は想った。

湖論暮刑事は、医師から聴き取ったことを想起した。実にあり得ないことが高石の肉体を襲ったのだ。飛行船が優雅に大空を泳ぐように飛んでいる晴れた時に、天保山の三角点の傍で独りの男が落雷を受けたと言う。もともと髪が薄い高石の頭頂部は焦げていた。そして、左手はぶ厚い包帯で巻かれていた。命に別条はないとの医師の判断であったが、一体何があったのだ！

高石は夢の中で、全てを悟った。高石が見た三人目の若者の顔は、天見千里の顔だった。ビバーク中のテント内で、何が起こったのか高石は知った。哀しい出来事だった。遭難事件以降の大小路敏と綾ノ町雄太の行動までが、スクリーンに投影されるかのように高石の脳髓に叩きこまれた。辛く哀しい二人の悲鳴にも似た声が高石の心に届く。高石は想った。これら一連の出来事は、三角点と対話すると言う天見千里は知っていたのだ。事実を知ったとしても天見千里は、他者に言えるものではない。他者に言えば、妄想癖を持った女だと言われるだけだった。

高石は、大小路敏と綾ノ町雄太の冥福を祈った。そして、一卵性双生児として生まれた天見千里の兄、天見司朗の冥福を祈った。

高石は、覚醒した。ベッドの右傍らにはコロンコロンした体軀の妻が椅子に腰かけて眠っていた。窓からは一二月の冬にしては暖かい陽光が差し込んでいた。日本全国節電ムードだが、この病室は暖かい。適切な室温管理がなされているようだ。居眠りを誘うほどの暖かさだった。

高石は、左の方に視線を変えた。同じく湖論暮刑事も暖かい陽光をまともに受けながら眠っていた。

「俺は何日……眠っていたのだ。――と、高石は考えた。高石は全てを知ってしまった。何とも摩訶不思議な状況だったが、何百という全国に散在する意識を持った三角点の声が……魂の叫び声が高石の脳髓に注ぎ込まれたのだった。

――こんなバカ話を信用して訊いてくれるのは、俺の仲間だけだな……。――

高石は、湖論暮刑事が目覚めるのを待っていた。声をかけて起こすのは気の毒だと思っただ。不眠不休の捜査で疲れきっているはずだ。

良い気持ちで眠っていた湖論暮刑事は目が覚めた。高石の顔を覗くと笑みを浮かべていた。

「湖論暮よ！伝えたいことがある」と、高石は言った。高石は、夢で観た……全ての内容を湖論暮刑事に語った。事実の積み重ねによる捜査を基本とする湖論暮刑事だが、高石の言葉には耳を貸す。異能を持つ探偵である高石は、今回も命がけで事態を明らかにしたのだ。湖論暮刑事は、高石の話を聞き終えた後、手帳の間に挟んでいた写真を取り出した。日焼けした三人の若者の写真だった。

「高石！退院したら山に行こうか？どこの山でも付き合うぜ！」と、湖論暮刑事は言った。

「そうだな……退院したら……まずは天見家の家に行かねば、天見司朗の冥福を祈るために線香の一本でも……それと天見千里の苦悩を解き放つ必要がある。天見千里の苦悩を共有できるのは俺と湖論暮だけだ。もう独りではない。独りで苦しむ必要はない！と言うことを彼女に言いたい。」

「そうだな……そうしよう……。」と、湖論暮刑事は視線を窓外に移した。病室の窓からは、六甲山の山々が見えた。

全ての出来事を一人の男の脳髓にぶち込んでしまった。何百という仲間が同時に叫びだすので俺は、制御できなくなつて、あの男にぶち込んでしまった。仲間は、元の無機質な世界に戻りたがっていたのだ。俺達は、そこに存在するだけで充分なのだ。俺の仲間の一つ一つが・・・静かに眠りに入っているようだ。信号が段々と弱くなっている。俺も眠くなつてきた・・・。

なんだって・・・結末が良く分からないって？ビバーク中に何が三人に起こったのかって・・・。
仕方がないなあ・・・。

悪天候で停滞を余儀なくされた三人は、残り少ない食糧を三人で均等に分けた。大小路敏と綾ノ町雄太の二人は、自分の取り分の食糧をすぐに食べきってしまった。二人は、疲労で眠り込んでいる天見司朗の食糧を奪い食べてしまった。疲労していた天見司朗は、飢えと寒さのために衰弱死した。

こういうことだ。大小路敏は、自責の念のため精神に変調をきたして和泉葛城山で自死した。そして、五年後・・・行方不明だった大小路敏の死亡を知った綾ノ町雄太も自責の念のため大浜公園の蘇鉄山近くで自家製のトリカブトの毒を吞んで死を選んだ。もっとも失恋が引き金だけだね。全ては、俺達の仲間が見ていた。

眠くなつてきたぞ・・・最後に、俺が永遠の眠りに入る前に言っておきたいことがある。

俺達を、汚い泥靴で踏みつけるな！

完 結